

も、執筆活動は続け、過日、某社の某賞を受け、処女出版を果たし、それを機に監査法人を退職、専業の小説家生活に入り、現在に至る。なお、処女出版の作品は本屋大賞にもノミネートされた。

Kは退職して専業小説家となり、一見、退路を断って、という感じだが、そんなことは決してない。彼には公認会計士という資格がある。「資格は腐らない」。公認会計士のKは、したがって、いつでも再就職ができる。退路を断るわけではないという「余裕」こそが今後もよい作品を生むことになると信じている。

加えてまた、肩書には信頼をもたらす。

医師は「単に」医療の専門家に過ぎず、弁護士は「単に」法律の専門家に過ぎず、会計士は「単に」会計の専門家に過ぎない。しかし、にも拘らず、なぜか、そうした肩書者の名刺を目にした人は、人格も信頼できる人、といったように「勘違い」してくる。

ちなみに、昨年の3月に慶應義塾で定年退職したボクは慶應義塾においては「名誉教授」の肩書を得たが、この肩書の最も有り難い点は、終生、「勘違い」してもらうような肩書入りの名刺をもつことができる、ということである。

2025年12月

第100回

## 肩書者

慶應義塾大学名誉教授  
横浜国立大学教授  
友岡 賛

(ボクは江幡淳氏の慶應義塾における「恩師」です。この『濃い字シリーズ』が第100回の節目を迎えるに当たり、寄稿の依頼を受けました。ちなみに、第50回の折にも寄稿しました。江幡公認会計士税理士事務所の今後の隆盛をもってネグリにげます。)

会計学者のボクは、ただし、斯学に加えて、プロフェッション論も手掛け、常に肩書者(地位や資格)というものの有り難さを説いている。いわく、「人間、肩書者より中身が大事」などといふやうだが、肩書者は重要である。「中身」はなかなか分らない。顔と肩書だけで分らない。

それに「資格は腐らない」。

ボクのゼミのOBにK氏という公認会計士がいる。同氏は江幡氏の後輩に該当。高校時代から小説家を志していたK氏は大学進学後は、小説家と併せて、公認会計士を志し、見事、現役合格を果たし、某大手監査法人に就職、監査業務に従事しつつ